審査員講評

田坂　清太（愛媛県俳句協会副会長）

スポーツをしている人自身が俳句を作ることが望ましい。大賞の句はそれに近づいている。

「サンドバック」に自分の肉体をぶっつけ黙々と練習にはげむ姿。「ビシと鳴る」から回し蹴りの練習風景を連想した。サンドバックにくいこむ足首。それが発する重くにぶい音。夏の盛りを過ぎた「晩夏光」の季語がぴったりである。

松森　向陽子（愛媛県俳句協会副会長）

俳句を通して震災を詠む試みは全国で繰り広げられ、現在も止むところがない。「被災地の球児宣誓風光る」の瓦礫の中から立ち上がって来た少年の姿には、強い意志が感じられ、同時に熱い感動が体を駆け抜けるのを覚えます。

「天高し組体操のどうと伏す」には青空のもと、体で構成するピラミッドの美しさと破壊の驚き。今後共スポーツ俳句大賞の進展を期待致します。

宮内　幸男（愛媛県美術会常任評議員）

スポーツの写真と俳句のハイブリッド部門は写真から句を作る難しさがあります。

大賞の作品は、秋の運動会を題材にし、画面いっぱいの競技者と応援者が一体になり秋の空が見えて来るような、写真と句の一体感がある。金賞、菅氏の作、五月の風が見えて来る感じの最高のシャッターチャンスでの作品と句、写真もいいです。金賞、藤原氏の作品もドラマがあります。父の日に最高のバッティングが出来た喜びが伝わって来ます。金賞、鳴滝氏、豚の顔と必死の人の顔がヒーローを生むのですね、力強さが伝わってきます。上位作品は、的確にシャッターチャンスを物にしています。句と一体感があります。

川本　征紀（愛媛県美術会評議員・二科会員）

例年違う競技と視点から写真と句作の合体表現を探すのは楽しい選考の時間でした。

今回の大賞作品はマスゲームがモチーフです。大勢の演技者のリズムの中の「天を指す」クライマックスにポイントを合し表現された秀逸作、作者の臨場感も伝わって来ます。

金賞の菅伸明氏の「ジャンプして　俺は五月の　風になる」は、まさにジャンパーの気概が見えています。同じく藤原利忠氏の「父の日に　感謝の一打　ホームラン」は、同慶の極み、嬉しい表現が素晴らしい。